

◆特集◆

「筆子塚」に出会い、 久留米村の学校変遷を知る



柳窪の「筆子塚」

柳窪は東久留米市の西端、東村山市と小平市の市境に接する。ひときわこんもりとした森に囲まれ、江戸、明治の頃の大型民家が奇跡のように残っている集落がある。その中で茅葺き屋根の村野家住宅は今年、国の登録有形文化財となった。黒目川が流れ、武蔵野の原風景をとどめる貴重な景観を保全しようと、市民の間でも旧家の協力を得てさまざまな活動が実施されている。

清々しいケヤキの屋敷林を抜け、柳窪5丁目の北原公園という小さな公園の隣に、集落の旧家である野崎

家墓所があった。その入り口近くに、ようやく見つけた「筆子塚」。高さ66センチ、小さくて見落としそうだった。正面に「浄心法師 靈位」その右に「安永四乙未天」左に「九月五日」、そして側面には「施主 手習門弟中」とある。筆子塚とは江戸時代から明治にかけて、寺子屋などで手習いを受けた人たち（筆子）が、師匠が亡くなった後にその遺徳を偲んだ墓のことだ。東久留米市内にはこのような筆子塚で、江戸時代のもの5基、明治時代のもの2基が確認されている。最も古いものが、安永4年（1775年）に建てられた、この旧柳窪村野崎家墓所にある筆子塚で、市指定文化財になっている。



郷土を語る野崎市郎さん

どっしりとした墓碑。その碑の上が筆の穂先のように丸くなっている。「清源和尚塔」と刻まれ、台座には大きく「筆子中」とある。周りには81名の筆子の名前が刻まれ、その中には後に村長となった人たちの名もある。やや青年層の人々対象の塾ではなかったかと推測されている。

それにしても旧柳窪、旧柳窪新田だけでも4基の筆子塚が残っている。草深い地であったろう当時に、どのようにして寺子屋は営まれていたのか。野崎家墓所を本家とともに共同管理し、かつて郷土史研究会の会長を務められていた野崎市郎さんに話を伺う機会を得た。

「モノを識っている人が頼まれて、師匠の役目をする。そのような人が自然発生し、寺の和尚だと寺子屋、民間人だと塾といったのです。墓所内の十三仏碑があるところに、元禄2年の頃から十三仏堂があり、堂守として坊さんがきていました。川越の蓮馨寺、新座の蓮光寺から来て、そこで近隣の子どもたちに手習いを教えていた。坊さんは何代も続きましたが、お世話になった坊さんへの報恩思慕の念の結集として筆子中の名のもとにこの墓が建てられたのでしよう。

卒寿を越えられた方とは思えないほど、明瞭でリズム感あるお話ぶり。脳内コンピュータに保存されている情報が即座にアウトプットされているかのようだ。

ある方から「柳窪に江戸時代の『筆子塚』がある」と聞いたのはこの春だった。以来、頭から離れなかった「筆子塚」のこと。訊ねたり、調べたりするうちに、江戸から昭和に続く東久留米の教育の歴史を垣間見ることができた。

「各々の字に塾まどがありましたね。明治初期の廃仏毀釈の後お寺はなくなっただけで、村役場の書記をしていた内田家の常吉さんが私塾を開いて教育していた。奥住さんのように幕末に、泊まりがけて稲城の長沼塾へ行く人もいたようです。勉強しようという意欲があり、経済的に余裕がある人は勉強していたのですね。教育は『今日行く』、明日じゃダメ、すぐやらなきゃ（笑）」

「地誌ふるさと東久留米」（平成7年発行）にこういう記述がある。

（十三弘の）碑文から推察すれば柳窪村の成立と考えられるのが寛文十年（1670）と思われるので、集落として形態ができてから二十年たらずで、既に子弟の教育が始められたことになり以後約三百年を経た



上左) 柳窪にある市内最古の筆子塚
側面に「施主 手習い門弟中」とある
下) 米津寺墓所内の筆子塚

今日まさに久留米の教育発祥の先人の心を偲しのばせるものである」

筆子塚は東久留米だけではなく、関東各地に散らばっている。人と人とのつながりが密であった時代、寺子屋の師匠は生涯の師であったのだろう。『仰げば尊し、我が師の恩』そのままに、筆子中が費用を出し合っ、墓を建てたという事実に感動を覚えるのは私だけだろうか。

小学校の移り変わり

次に滝山にあるわくわく健康プラザ内の東久留米市郷土資料室を訪ねた。学芸員の山崎丈さん（生涯学習課課長補佐・文化財係長）から明治以降の学校の話の話を伺うとともに、資料を見せていただいた。



明治5年に学制が公布されてからも校舎がないので、しばらくは寺院や民家を借りて、授業が行われていたようである。久留米に初めて尋常小学校ができたのは明治17年（1884）のこと。前沢村（現在のこみ対策課の場所）に成蹊学校ができ、翌年、南沢村（多聞寺敷地内）に共立学校が開校。前沢、柳窪など西側は成蹊学校へ、東側の小山、南沢などは共立学校へと通学区域が分けられていた。

明治22年（1889）、10の村が合併して「久留米村」が成立すると、村役場は成蹊学校内に併設された。明治36年（1903）成蹊・共立両校に高等小学校が設置された時は、前沢宿で唯一の宿屋であったという「江戸屋」を借り受け、仮校舎としたとか：不自由ながらも向学心に燃えていただろう、当時の子どもたちが偲しのばれる。この頃の学校は尋

常科が4学年で、3年までは男女一緒、高等科は2学年（明治37年から4年に延長）で男女別だった。明治40年（1907）から尋常科が6年制の義務教育に改められた。

明治39年に成蹊・共立学校が合併して「久留米尋常高等小学校」が、高等科が置かれた前沢に開設。これが現在の市立第一小学校の前身である。その時も旧「江戸屋」の仮校舎が使われたが、開設にあたり、江戸屋の土地と建物は村が取得したそうだ。そして共立学校は東分教場（ミナミザガツコウと呼ばれていた）、成蹊学校は西分教場と改称され、尋常科の低学年が使用した。児童数の増加による教室不足のため、増築、新築を繰り返しながら、村に1つの学校（本校）、2つの分教場がある状況が昭和時代まで続いたのであった。東分教場は現在の南沢交番付近に新築された後に、今の第三小学校の位置に移転。西分教場は昭和3年新築されたが、昭和43年に廃校となった。

野崎家本家の野崎光雄さんが西分教場、本校へ通っていた頃の思い出を語ってくださいました。野崎さんは現在84歳、前東久留米市長、野崎重弥さんの父上である。大変お元気で、この日も畑仕事から帰って来られたところだった。

「雪が降った朝は、授業が始まる前に『雪かきだよ』と所沢街道まで雪かきしたもんです。運動会は村あげてのおまつりでネ、出店もでるくらい。みかんも売ってたけど、すっぱかったな。部落対抗リレーの時は各部落のハチマキの色が決まっています、柳窪は赤、下里は空色、他の色も全部覚えてますよ。ともかく大盛り

上がりで楽しかった。6年生になると都立の農芸学校に行くために、教室で残り勉強をしていた。クラスに6人いましたね」

特色ある私立学校や

施設が次々に

昭和初期からは私立の学校や施設が続々とつくられてきた。昭和4年

から13年の間に、大門町の浄牧院境内に「浄牧学園女学校・工芸学校」があ

ったという話は初耳だった。高等女学校は定員70人、村以外から通学する人もいた。今の短大に相当する女子工芸学校は全寮制で学費無料、自給自足が原則。高等女学校卒業生を対象に全国に門戸を開いていた。昭和53年まで女学校の建物は残っていたものの、火災により焼失したという。

昭和9年には自由学園が目白雑司ヶ谷から学園町（旧南沢村）へ移ってきた。フランク・ロイド・ライトの弟子、遠藤新氏が設計した木造校舎はこ



野崎光雄さん

の頃に建造されたもの。現在も変わることなく約3万坪のキャンパスに美しい姿が点在している。

郷土資料室がある場所（元の滝山小学校）あたりには早稲田大学学徒錬成部・久留米道場が昭和16年に建てられた。戦時下の学生の心身鍛錬の場として開設されたもので、学生たちは当時、花小金井駅と小平駅の間にあつた東小平駅で降り、徒歩で来ていたという。戦争の激化とともに錬成実施設が困難となり、昭和20年5月に道場は姿を消した。

他にも学芸大学の前身である豊嶋師範学校の農業実習施設「成美荘」と「府立久留米学園」（現都立久留米養護学校）が昭和11年に開設。また、昭和7年から15年まで中央町1丁目には1万6千坪の拓殖大学総合運動場があった。さらに昭和30年には「坂の上の雲」の主人公秋山兄弟ゆかり

の、伝統ある「常磐学舎」（愛媛県中予地区出身者の東京学生寮）ができた。木造家屋だった寮が、現在は鉄筋コンクリートに建て替えられ、東久留米郵便局の近くにある。

以上はすべて東久留米が「久留米村」（昭和31年に久留米町に）であった時代にできた教育施設である。なぜこんなにさまざまな施設が久留米の地につくられたのだろうか。

「広くて平坦な土地があつて、自然豊かで環境にも水にも恵まれていたこと。そして武蔵野鉄道（現池袋線）が敷かれ、比較的便利で程よい距離の東京郊外であつたからでしょうか」と山崎さん。

今もしっかりと息づいている学校、歴史の彼方へと消えた施設、いずれにしても先人たちの教育にかけた熱意に心動かされるものがあつた。

【参考文献】

- 「東久留米の江戸時代」（東久留米市教育委員会発行）
- 「地誌ふるさと東久留米」（東久留米郷土研究会発行）
- 「郷土資料室通信」（東久留米市郷土資料室発行）
- 「杜の西北」（東久留米稲門会・会報）



久留米尋常高等小学校 右端の2階建てが仮校舎 手前の道が現在の小金井街道（大正5年撮影）（『光の交響詩』東久留米市教育委員会刊より）